

『 この町に主の教会あり 』

使徒の働き 28章 1～10節

◆ 主の備えあり

【1-2節】276人すべての乗船者たちが無事に陸に辿り着きました。彼らが陸に着いて分かったことはここがマルタ島であるということでした。1節で【こうして救われてから】と当事者そして著者であるルカが記しております。マルタ島の語源“メリタ”はカナン語で“避難所”を表します。パウロとすべての乗船者が主の約束どおりに守られ救われて辿り着いた場所は避難所という意味のマルタ島であったことは奇遇ではないのかも知れません。2節で【島の人々は私たちに非常に親切にしてくれた】と記されています。“島の人々”と訳されるギリシヤ語“バルバロス”は「先住民」を表します。ユダヤ人がユダヤ人以外の人々を異邦人と呼んだように、当時、ギリシヤ人はギリシヤ人以外の人々を“未開の人”という意味を込めてバルバロイと呼んでいました。ここマルタ島に住んでいた人々はフェニキヤ人であったと思われます。“未開の人々、先住民”が暮らす“避難所”という意味を持つマルタ島に、パウロとすべての乗船者が上陸したわけですが、島の人々は云わばよそ者である乗船者たちを温かく迎えてくれました。以前確認しましたが、ただでさえ地中海は渡航禁止になる秋から冬にかけての季節です。そのような中、皆が海に飛び込んでこの島に辿り着いたのです。更に雨が降り出してきたのですから、ずぶ濡れの状態で震える状況だったことが容易に伺えます。島の人々は【非常に親切にしてくれ】ました。【彼らは火をたいて】凍えそうな乗船者たちに暖をとらせて、もてなしてくれたのです。

主なる神様がパウロとすべての乗船者のいのちを守られるとの約束は、この島の人々のもてなしの行為にも表されています。そして今朝もう一つ心に留めたいことは、パウロの姿を私たちの教会と重ねるときに、主なる神様のご計画と導き、守りによって教会がそこにあるということは、そこに主なる神様の備えがあるということです。私たちの教会が、この地域に住む人々の理解や協力、理解を得ることが出来なければ、公に礼拝したり伝道することは困難です。地域の人々の一定の理解があります。主なる神様の備えがあるということを中心に刻みたいのです。

◆ 教会を取り巻く人々

さて、島の人々の好意により暖をとることが出来た乗船者たちは皆で協力して薪を集めます。【3-4節】パウロもまた、ひとかかえの柴を束ねて火にくべました。すると柴の中で枝のようになって冬眠していたであろう一匹のマムシが、振動と熱気によって目を覚まして這い出してきます。そしてパウロの手に取りついたのでした。【手に取りついたので】とはパウロの手に噛み付いたということでしょう。毒を持つマムシです。パウロの手に噛み付いたマムシがぶら下がっている様子を見て島の人々は言いました。【この人はきっと人殺しだ。海からは逃れたが、正義の女神はこの人を生かしてはおかないのだ】と。日本では「天誅」という言葉があります。島の人々は天誅のごとく裁きが下ったと考えました。パウロはきっと人殺しのような悪人で、海の困難は免れても正義の女神が今裁きを下していると互いに話し合ったのです。島土着の先住民らしい考え方と言えるでしょう。【5-6節】パウロはといえば、痛みを堪えたり特に動揺した様子はここには描写されておりません。ただこのマムシを火の中に払い落としたりとだけ記されています。恐らくパウロはここでも主の守りという強い信仰の上に堅く立っていたでしょう。ここで強調されていることは、パウロの様子よりも島の人々の様子、考え方が大きく変化したということです。パウロの手からマムシは振り落とされたものの、島の人々はパウロの手が腫れ上がってきて、そのうちに

倒れて息絶えてしまうだろうと予想していました。しかしパウロは平然としていたのです。それを見た島の人々は【この人は神様だ】と言い出したわけです。

先ほどは「天誅のごとく正義の女神の怒りが下された」と崇りがあったかのようにパウロを極悪人のように考えましたが、今は「この人は神だ」とパウロへの評価、見方が極端に変わるのです。これは決して島土着の人々特有のものと言えないことでしょう。不吉と思えば天誅や崇りと考え、超越的な出来事に触れると神々しさを感じます。島の人々はパウロの信仰、パウロに働いてくださる主なる神様の存在を知りませんでした。パウロの身に起こる現象だけを見て考え予想しました。教会が存在する地域の人々は、教会が最も大切にしている主なる神様への信仰には無関心であっても、教会に注目しています。私たちの教会も困難に幾度となく直面する時、主イエス様のご計画と約束を信じる信仰に堅く立って揺るがされたくないのです。人々は教会を見てあれこれ考えて予想するかもしれませんが。しかし教会は変わらずに救い主なる神様を礼拝し、伝え続けるのです。私たちの教会は信仰に堅く立って感謝と喜び、希望に絶えず満ち溢れていたいのです。

◆ 主なる神が現される

島の人々はパウロの信仰の本質に近づくことになります。【7-10節】乗船者たちが上陸した場所の直ぐそばにはマルタ島首長の領地がありました。“島の首長”とは文字通りマルタ島先住民のリーダーです。彼の名はポプリオです。パウロの身に起こった出来事を通して島中の人々が、パウロのただならぬ存在感に注目していたことでしょう。首長ポプリオはパウロやルカたちを招待して三日間手厚くもてなしてくれました。8節で【たまたまポプリオの父が、熱病と下痢とで床に着いていた】と記されているように、首長ポプリオは何か企みがあったり、パウロへの特別な要望があってもてなしたわけではないでしょう。むしろ、パウロがポプリオの父の病気に気付いたのです。熱病と下痢とは“マルタ熱”で知られるこの島特有の病気のことです。そこでパウロは、ポプリオの父のもとに行き、祈ってから彼の上に手を置いたのです。パウロは「主なる神様がポプリオの父を癒して治してください」と祈ったことでしょう。「この痛む部分を主が癒してください」と祈りながら、ポプリオの父のお腹に手を置いたことでしょう。主なる神様は病をも癒してくださるお方です。この祈りを通してポプリオの父の病いが癒されました。この出来事は島中の人々の知るところとなり、他の病人たちもパウロのところに来て癒されるのです。伝道者パウロには癒しの賜物が神様によって与えられていました。ここで強調されていることはパウロが「主に祈ってから手を置いた」ということです。島の人々はマムシに噛みつかれても平然としていたパウロに奇跡的な力を感じて「この人は神様だ」と注目しました。しかし今、パウロが神様なのではなく、パウロが祈り願う先に病人を癒してくださる真の神様がおられるということが島の人々に明らかにされているのです。パウロが奇蹟を起こすのではなく、パウロが信じて従い、祈り願うお方、救い主なるイエス・キリストこそ奇蹟を起こして癒してくださる真の神様であると言うことが島の人々に証しされたのです。教会がどのような現実的困難や試練の中を通ろうとも、変わらずに主なる神様を褒め称えて礼拝し、救い主を伝える姿を人々は見えています。信仰に堅く立って感謝と喜び、希望に絶えず満ち溢れている教会の姿を人々は見えています。私たちの教会は特別な賜物を与えられているわけではないかも知れません。しかし私たちの教会は主なる神様が祈りを聞いてくださるお方であることを知っています。私たちの教会が礼拝し、祈り願う真の神様が癒し主であり救い主であることが証しされなければなりません。ですから私たちは、私たちの教会の勢力を頼りとするのではなく、私たちの教会を通して働かれる主イエス・キリストを証しし続けるのです。

◆ まとめ・お勧め

主なる神様はご計画と目的をもってこの町に、いのちの泉聖書教会を与えられました。

私たちの教会そのものには大きな力はないのかも知れません。しかし私たちにはこの町にあって大きな使命が託されているのです。この町の人々は教会を見ています。主は私たちの教会が生まれる前から、そしてこの先もこの教会のために備えを与えてくださいます。信頼しましょう。この町の人々は教会を見て様々な評価や考えを持つでしょう。しかし私たちは堅く信仰に立って感謝と喜び、希望に満ち溢れ続けたいのです。そして私たち教会の礼拝、交わり、伝道、祈りの信仰を通して主なる神様が働いてくださいます。私たちはその救い主イエス・キリストを証しし続ければそれで良いのです。私たちではなく私たちの主の救いと癒し、大いなる業が教会を通して表されることを切に願ってまいりましょう。